

# 佐賀大学コスメティックサイエンス学環

## 設置の趣旨等を記載した書類（本文）

### 目次

|                                               |             |
|-----------------------------------------------|-------------|
| ① 設置の趣旨及び必要性                                  | ・ ・ ・ P. 2  |
| ② 学部・学科等の特色                                   | ・ ・ ・ P. 15 |
| ③ 大学、学部・学科等の名称及び学位の名称                         | ・ ・ ・ P. 17 |
| ④ 教育課程の編成の考え方及び特色                             | ・ ・ ・ P. 20 |
| ⑤ 教育方法、履修指導方法及び卒業要件                           | ・ ・ ・ P. 24 |
| ⑥ 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的計画    | ・ ・ ・ P. 27 |
| ⑦ 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画 | ・ ・ ・ P. 27 |
| ⑧ 取得可能な資格                                     | ・ ・ ・ P. 27 |
| ⑨ 入学者選抜の概要                                    | ・ ・ ・ P. 28 |
| ⑩ 教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色                        | ・ ・ ・ P. 29 |
| ⑪ 研究の実施についての考え方、体制、取組                         | ・ ・ ・ P. 30 |
| ⑫ 施設、設備等の整備計画                                 | ・ ・ ・ P. 31 |
| ⑬ 管理運営                                        | ・ ・ ・ P. 31 |
| ⑭ 自己点検・評価                                     | ・ ・ ・ P. 33 |
| ⑮ 情報の公表                                       | ・ ・ ・ P. 34 |
| ⑯ 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等                       | ・ ・ ・ P. 36 |
| ⑰ 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制                        | ・ ・ ・ P. 36 |

## ① 設置の趣旨及び必要性

### (1) コスメティックサイエンス学環（仮称）を設置する理由・必要性

佐賀大学は、「地域と共に未来に向けて発展し続ける大学」として、地域に根ざした社会貢献、教育、研究を推進し、地域活性化の中核拠点を目指している。この理念に基づき、令和2年4月1日「佐賀大学のこれから ―ビジョン 2030―」【添付資料1】を策定し、第4期中期目標・中期計画の基盤としている。教育分野では、「しなやかな知性と未知なる領域に踏み出す行動力を基盤に、多様な人々との協働を通して持続可能な社会を構築できる人材を育成する」というビジョンを掲げ、その実現のため「時代のニーズに対応した分野横断型の学位プログラムの構築」を最重要目標としている。コスメティックサイエンス学環は、このビジョンに沿って設置する新たな学位プログラムであり、佐賀大学の知的資源と研究成果を活用し、化学、生物学を中心に、皮膚科学、薬学、工学などを横断的に学べるよう、教員配置や教育施設の再編・改革を進めて設置するものである。

令和7年2月の中央教育審議会の答申「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～」【添付資料2】においては、学際的・実践的な知の創出と社会課題への対応力を持つ人材育成が強調されている。この観点から、コスメティックサイエンス学環の新設は、化粧品産業における科学・技術・文化・健康の融合領域に対応し、多様な専門知と実務能力を統合的に学ぶ場として極めて重要であり、また、地域産業との連携や国際展開も視野に入れた教育研究拠点として、答申の理念に合致するものである。

令和4年5月に教育未来創造会議から提言された「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」【添付資料3】においては、「科学技術や地域資源を活用した地域振興における課題の解決に挑み、高度専門人材の育成、産業界からの人材需要、理工系分野の学問を専攻する女性増加などを考慮して、新たな科学技術や地域振興の課題に取り組みたい進学者のニーズに対応する大学の学部等の再編を促進する。」としている。また、平成30年11月に文部科学省中央教育審議会から答申された「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」【添付資料4】においては、「学術研究においても産業社会においても、分野を越えた専門知の組合せが必要とされる時代であり、一般教育・共通教育においても従来の学部・研究科等の組織の枠を越えた幅広い分野からなる文理横断的なカリキュラムが必要」とあり、専門教育においても従来の専攻を越えた幅広くかつ深いレベルの教育が求められている。

令和3年3月に閣議決定された「第6期科学技術・イノベーション基本計画」【添付資料5】においては、「大学・国立研究開発法人等有するイノベーションの源泉である知と社会ニーズとのマッチングを加速化するため、産学官共同研究の推進や、若手研究者と産業界とのマッチングを強化する。」など産学官連携による新たな価値共創の推進が求められている。

佐賀県においては、平成25年に唐津市や玄海町等の自治体、佐賀大学、研究機関の他、化粧品関連、金融機関等の企業が参画する一般社団法人ジャパン・コスメティックセ

ンター（JCC）が設置され、これを契機として佐賀県のコスメティック関連事業が始まり、佐賀県特産の原材料を研究・製品化する化粧品関連企業数が次第に増え、企業誘致の効果もあり、令和7年予定の2社を含めると16社が県内に進出している。【添付資料6】令和5年8月、佐賀県は「佐賀県施策方針2023」【添付資料7】を策定し、成長産業の育成・集積や中小企業の持続的発展を進め、若者の県内定着・回帰、佐賀県産業を支える人材の育成・確保に取り組む事業の柱として佐賀県「コスメティック構想」を立上げ、コスメティック産業の集積地および自然由来原料の供給地を目指す事業を加速化させている。

本学は、上記の佐賀県の取組みと連携・協力し、平成30年には唐津キャンパス（佐賀県唐津市）をコスメ及びヘルス関連プロジェクトの拠点として整備し、教育・研究を推進している。令和3年には佐賀県と共同で化粧品科学共同研究講座を設置し、この講座設置を契機に佐賀大学と化粧品関連企業等との共同研究は活性化し、平成27年度から令和6年度までの共同研究締結数は29件に達している。【添付資料8】

今後、学環設置により地元企業との連携が強化され、最新の研究成果を地域企業に還元し、技術革新を促進することが可能となり、地域と大学が一体となって化粧品産業の発展を推進し、地域経済の活性化と持続可能な成長に寄与するため、より高い水準の品質や機能、地元由来の天然資源を活用した化粧品開発や多様な専門知識・技術を持つ人材育成を行う。地域の若者に高度な専門知識と技術を提供し、将来の産業リーダーを育成する役割を果たすことにより、地域の雇用機会が増加し、若者の地元定着が促進される。このような状況を踏まえ、佐賀大学と佐賀県は、地域課題への対応、人材育成、学術研究の推進などを目指して「コスメティックに関する包括連携協定」を令和7年5月に締結した。【添付資料9】同様に唐津・玄海地域を中心に、美容・健康産業の集積地をつくる「唐津コスメティック構想」を推進する唐津市と令和7年3月に「コスメティックに関する包括連携協定」を締結した。【添付資料10】

日本の高等教育機関の理系分野（自然科学・数学・統計学/工学・製造・建築）入学者で女性が占める割合は、OECD（経済協力開発機構）加盟国38か国中最下位である。【添付資料11】このため、令和4年5月の教育未来創造会議の「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」では、理系分野で学ぶための大学の受け皿を大幅に拡充し、特に女性が理系分野で活躍できる環境を整備することなど、理系女子学生の進学機会を増やし、彼女たちの能力を最大限に引き出すことを目指す施策が提案されている。本学環を含め、生物学や化学分野への女性入学者の割合は他分野に比べて高く、身近な「化粧品」への科学的探究心も強い。化粧品業界でのキャリアを目指す学生も多いが、化粧品について専門的・総合的に学ぶことのできる教育組織は非常に少ない。これに関連して、令和6年11月24日に対面とオンラインの併用で実施したコスメティックサイエンス学環の概要、入試等の説明会「未来発見オープンデイ」には、全国31都道府県から321人の高校生や保護者が参加し、コスメティックサイエンス学環への関心が非常に高

いことが検証できた。なお、高校生の参加者のうち、約 85%は女子生徒であった。【添付資料 12】 このように、新しい学びの場を作ることは、全国の高校生からも大きく期待されており、子供たちの夢や希望を叶えるという大きな意義もある。

産業界の動向としては、令和 3 年 4 月、経済産業省と日本化粧品工業連合会（東京都港区）は、日本の化粧品産業の更なる競争力強化と継続的な発展を目指すため、産学官で構成する「化粧品産業ビジョン検討会」（座長：伊藤 邦雄、国立大学法人一橋大学 CFO 教育センター長）を立ち上げ、産学官で初となる化粧品産業の将来ビジョン「化粧品産業ビジョン」【添付資料 13】を策定した。化粧品産業ビジョン検討会は、「日本の先端技術と文化に基づいた Japan Beauty を世界に発信し、人々の幸せ (well-being) と世界のサステナビリティに貢献する産業へ」をビジョンとして掲げ、目指すべき方向性及び具体的取組として産学官によるビジネス環境の整備や更なる研究開発の取組の必要性について提言した。世界における化粧品市場は 2023 年に約 5,000 億ドルに達し、2026 年までに年平均 11%の成長が見込まれており、日本は化粧品輸出額においてフランス、韓国に次いで世界第 3 位の位置を占める優位な立場である。韓国では、政府が「K-ビューティー」を国の新たな輸出主力産業として成長させるため、さまざまな支援策を講じている。例えば、2019 年に「未来化粧品産業育成法案」を発表し、2021 年には「K-ビューティー革新総合戦略」を作成し持続可能な革新技术開発、産業エコシステムの造成、規制改善、戦略的な海外進出支援を行っている。【添付資料 14】

成長著しい同市場において、ポゼッションをより高めるためにも化粧品関連産業に関係する人材育成は急務と言える。

佐賀県内の化粧品生産額は 2014 年の 64 億円から 2023 年には 135 億円と約 2.1 倍に増え、全国平均推移 0.9 倍と比較してもその成長規模は大きい。【添付資料 15】

このような市場の拡大に伴い、化粧品業界では幅広い知識と技術を備えた人材が不足しており、その育成が急務となっている。また、令和 7 年 2 月、日本化粧品工業会と化粧品企業で活躍する領域とそれに求められる専門性について意見交換を行った際は、化学・生物学を中心とした専門知識に加え、実践力、課題解決力、コミュニケーション力など幅広いスキルが求められており、化学、生物学、皮膚科学、薬学、工学など複数の学問を融合しながら化学物質の有効性や安全性を幅広い視点から学び、かつ、PBL 学習等で課題に対する能動的・主体的な学びの姿勢を育てるコスメティックサイエンス学環の教育課程は、まさに企業が求める人材像と合致するものである。【添付資料 16】

佐賀大学のコスメティックサイエンス学環は、こうした市場の需要に的確に対応し、社会的価値の創出に寄与することが可能であり、化粧品業界の発展に大きく貢献することが期待される。

化粧品の安全性の側面では、独立行政法人国民生活センターに 2019 年～2023 年の過去 5 年間に年平均約 3,000 件の化粧品による皮膚障害に関する消費生活相談が寄せられるなど、化粧品の素材の知識、人体への影響、安全性、製造にいたるまでの科学的根拠に基づ

いた基礎知識・技術を備えた人材が必要とされている。【添付資料 17】また、化学・生物学・医学等の幅広い知識を持った人材がいないため、化粧品業界では、それぞれ不足している知識を補う教育を企業で行うほか、研究者や技術者が独学で学ぶケースも多いと言われる。

コスメティックサイエンス学環は、複数の学問分野を統合、融合した学際的な教育・研究が特徴であり、化学、生物学、皮膚科学、薬学、工学など、さまざまな分野の知識を統合して学ぶカリキュラム編成である。これにより、化粧品の成分や効果、安全性について幅広い視点から理解を深めることができる。このような学際的な教育は、現代の複雑な社会課題に対応するために非常に重要である。

以上のように、本学がコスメティックサイエンス学環を設置することは、地域社会への貢献、人材育成、産業振興、そして「佐賀県コスメティック構想」との連携という多岐にわたる意義があり、地方国立大学としての使命を果たし、地域と全国の発展に寄与するものである。

## （２）養成する人材像

先述のとおり、国の方針、計画等を見据え、地域からの期待に応えるため、コスメティックサイエンス学環では、学生に自律的に学ぶ姿勢、原理・原則を理解する力、アイデア創出能力、問題発見能力、課題設定能力、構想力、モデル化能力、課題解決・遂行能力を身に付けさせ、社会の変革に柔軟に適応できる幅広い教養と生命科学の基礎力を土台として、学際的視点からコスメティックサイエンスに関連した広い分野で活躍できる科学技術の専門的素養を持つ以下のような人材を養成する。

### ① 基礎科学の知識を深く理解し、応用できる能力を持つ人材

化粧品の開発には、化学、生物学、皮膚科学、薬学、工学などの基礎科学の知識が不可欠であり、これらの知識を基に、新しい成分の開発や既存成分の改良を行い、安全で効果的な製品を創出する能力を備える。

### ② 実践的な技術と創造力を兼ね備えた人材

実験や研究を通じて得た知識を実際の製品開発に応用し、消費者のニーズに応える製品を生み出す力を育て、創造力を発揮し、独自のアイデアを形にすることで、競争の激しい市場で差別化を図ることができる。

### ③ 倫理観と社会的責任を持つ人材

化粧品業界は消費者の健康や安全に直接関わるため、高い倫理観と社会的責任が求められる。法規制を遵守し、環境に配慮した製品開発を行うことで、持続可能な社会の実現に貢献できる。

### ④ グローバルな視野を持つ人材

化粧品業界は国際的な市場であり、異文化理解や国際的なビジネススキルが求められる。海外の最新動向を把握し、国際的な競争力を持つ製品を開発する能力を備える。

⑤ コミュニケーション能力とチームワークを重視する人材

研究開発はチームで行うことが多く、他者との協力や情報共有が重要であり、効果的なコミュニケーションを通じて、チーム全体の力を最大限に引き出すことができる。

(3) ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー

本学では、基礎的及び専門的な知識と技能に基づいて課題を発見し解決する能力を培い、個人として生涯にわたって成長し、社会の持続的発展を支える人材を養成する。そのために、佐賀大学の学士力を（全学的に）次のとおり位置づけている。

1. 基礎的な知識と技能

(1) 市民社会の一員として共通に求められる基礎的な知識と技能

様々な学問分野（自然、文化、社会）における基本概念や思考方法を理解し、現代社会の諸問題を自らの力で合理的かつ論理的に推論し判断することができる。

(2) 市民社会の一員として思考し活動するための技能

① 日本語による文書と会話で他者の意思を的確に理解し、自らの意思を表現し、他者の理解を得ることができる。

② 英語を用いて知識を修得し、グローバル社会に向けて自らの考えを発信することができる。

③ 情報を収集し、その適正を判断し、適切に活用・管理することができる。

(3) 専門分野に必要とされる基礎的な知識・技能

専門分野について、基本概念や原理を理解して説明することができ、一般的に用いられている重要な技法に習熟している。

2. 課題発見・解決能力

(1) 現代的課題を見出し、解決の方法を探る能力

現代社会における諸問題を多面的に考察し、その解決に役立つ情報を収集し分析することができる。

(2) プロフェッショナルとして課題を発見し解決する能力

専門分野の課題を発見し、その解決に向けて専門分野の知識と技法を応用することができる。

(3) 課題解決につながる協調性と指導力

課題解決のために、他者と協調・協働して行動でき、また、他者に方向性を示すことができる。

3. 個人と社会の持続的発展を支える力

(1) 多様な文化と価値観を理解し共生に向かう力

歴史や文化・伝統などの違いを踏まえて、平和な社会の実現のために、自己と同時に他者の立場に立って物事を考えることができ、また自然環境や社会的弱者に配慮することができる。

(2) 地域や社会への参画力と主体的に学び行動する力

地域や社会の様々な問題に関心を持ち、地域や社会における自らの役割を主体的に選択・決定し、課題に向けて、主体的に学び行動することができる。

(3) 高い倫理観と社会的責任感

高い倫理観によって社会生活で守るべき規範を遵守することができ、社会の健全な維持・発展に主体的に寄与する姿勢を身に付けている。

上記の佐賀大学学士力に基づき、コスメティックサイエンス学環では、以下のとおりディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを定める。

### ディプロマ・ポリシー

コスメティックサイエンス学環では、学生に自律的に学ぶ姿勢、原理・原則を理解する力、アイデア創出能力、問題発見能力、課題設定能力、構想力、モデル化能力、課題解決・遂行能力を身に付けさせ、社会の変革に柔軟に適應できる幅広い教養と生命科学の基礎力を土台として、学際的視点からコスメティックサイエンスに関連した広い分野で活躍できる科学・技術の専門的素養を持つ人材を養成する。

佐賀大学学士力を踏まえ、学生が身に付けるべき以下の具体的学習成果の達成を学位授与の方針とする。また、学則の定める卒業の認定の要件を満たしたものには、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、学位を授与する。

1. 基礎的な知識と技能

- (1) 自然、文化、社会に関する基礎的な知識を身に付けている。
- (2) 日本語による高いコミュニケーション能力と英語による専門知識の修得及び発信する能力を身に付け、適切にプレゼンテーションする能力を身に付けている。
- (3) コスメティックサイエンス分野及びこれに関連する分野において必要な知識を収集し、分析及び考察する能力を身に付けている。

2. 課題発見・解決能力

- (1) 現代社会における諸問題をコスメティックサイエンス及びこれに関連する分野の立場から考察することができる。
- (2) コスメティックサイエンス及びこれに関連する分野において、知識や技法を応用し、課題解決に取り組むことができる。
- (3) コスメティックサイエンス及びこれに関連する分野における課題解決のため、他者と協調・協働して取り組むことができる。

3. 個人と社会の持続的発展を支える力

- (1) 自然環境、文化や伝統、多様な価値観を理解し、自主的・自律的に学習を続けることができる。
- (2) 専門的知識・能力を持ち、倫理観を備えた職業人として地域や社会の健全な発展に寄

与する力を身に付けている。

## **カリキュラム・ポリシー**

学位授与の方針を具現化するため、以下の方針の下に教育課程を編成、教育を実施する。

### **1. 教育課程の編成**

学位授与の方針を具現化するために、以下の方針の下に教育課程を編成・実施する。

#### **(1) 基礎的な知識と技能**

- ① 教養教育において、市民社会の一員として共通に求められる基礎的な知識と技能に関する「基本教養科目」を選択必修として配置する。
- ② 教養教育において、市民社会の一員として思考し活動するための技能に関する授業科目（「外国語科目」、「情報リテラシー科目」）を必修として配置する。
- ③ 専門教育において、必要な知識を収集し、分析及び考察する能力を身に付けさせるための授業科目として、「コア科目」を必修として配置する。

#### **(2) 課題発見・解決能力**

- ① 教養教育において、様々な課題を発見・探求する力、協調性と指導力、倫理観・社会的責任感を身につけさせる科目、「大学入門科目」、「インターフェース科目」を選択必修として配置する。
- ② 専門教育において、課題解決能力を身に付けさせるため、プロジェクト型演習の「コスメティックサイエンスPBL」を必修として配置する。
- ③ 専門教育において、コスメティックサイエンス及びこれに関連する分野における様々な課題を発見・探求する力、様々な課題に対して情報技術等を用いて考察及び解決する力を身に付けさせるための専門教育科目を必修または選択として配置する。

#### **(3) 個人と社会の持続的発展を支える力**

- ① 教養教育において、多様な文化と価値観を理解し共生に向かう力、地域や社会への参画力と主体的に学び行動する力、及び高い倫理観と社会的責任感を身に付けさせる授業科目「インターフェース科目」を、選択必修として配置する。
- ② 専門教育において、地域の課題や社会の問題を自己のものとしてとらえ、考え、発信する力を身に付けさせるため、学環周辺科目「企業インターンシップS・L」を配置する。
- ③ 専門教育において、高い倫理観と社会的責任感を身に付けさせるため、「科学技術者倫理」、「知的財産法」を必修として配置する。
- ④ 社会の中で直面する諸問題を正確に理解し対処する力を養うために「卒業研究」を必修として配置する。

### **2. 教育の実施体制**

- (1) 各授業科目は、その内容に適合した教育能力を有する教員を配置して実施する。



- (2) 教育課程の編成・実施に関する課題分析およびその改善については、授業担当教員により構成される教員会議において審議・決定し、これを実施する。
- (3) 全ての学生に指導教員（チューター）を配置し、ラーニング・ポートフォリオを活用して履修指導や学修支援を行う。
- (4) 全ての授業科目でシラバスを明示し、各授業科目の学修内容、到達目標、成績評価の方法・基準を学生に周知する。
- (5) 各学期末には学生による授業評価アンケートを実施し、これをもとに不断の授業改善を行う。
- (6) 授業科目間の関連や科目内容の難易度を表現するコースナンバリングを行い、カリキュラムの構造をわかりやすく明示する。
- (7) 卒業研究（必修）を4年間の学修成果を示すものとして位置付け、ルーブリックを活用した総括的評価を実施する。

### 3. 教育・指導の方法

- (1) 各授業科目は、シラバスに明示された講義概要、授業計画に従って実施する。
- (2) 2、3年の各学期に実験を配置し、講義、演習と実験を組み合わせることで学修効果を高める。
- (3) 各授業科目で課題を与え、それをシラバスに明記し、授業時間外の学生の自己学修を促す。
- (4) 実験科目ではグループもしくは個人単位での少人数教育を行い、ティーチングアシスタントを有効に活用して実践的な知識と技術を修得させる。
- (5) カリキュラムに基づき、教員会議が教育分野ごとの講義実施と学期毎の実施・評価状況報告を行う。この報告内容と各種アンケートの集計結果について、教育FD委員会が点検・分析を行う。教育改善委員会は、教育FD委員会による点検・分析結果に基づき、教育改善の実施と指導を行う。

### 4. 学修成果の評価

- (1) 授業科目の学修成果を評価するために、授業科目担当教員は、測定する到達目標の特性に応じて、筆記試験、レポート（論文）、作品、発表、活動内容等により評価を行う。
- (2) 個別の授業科目の成績評価方法については、シラバスに明示する。
- (3) 成績の評語（評価）は、100点を満点とした評点又は評価基準に基づき判定するものとし、評点及び評価基準は、次の表に掲げるとおりとする。

| 評語<br>(評価) | 評点    | 評価基準               | 可否判定 | 成績評定<br>(GP) |
|------------|-------|--------------------|------|--------------|
| 秀          | 90点以上 | 学修到達目標を十分に達成し、極めて優 | 合格   | 4            |

|    |                  |                    |     |   |
|----|------------------|--------------------|-----|---|
|    |                  | 秀な成果を上げている。        |     |   |
| 優  | 80 点以上<br>90 点未満 | 学修到達目標を十分に達成している。  |     | 3 |
| 良  | 70 点以上<br>80 点未満 | 学修到達目標をおおむね達成している。 |     | 2 |
| 可  | 60 点以上<br>70 点未満 | 学修到達目標を最低限達成している。  |     | 1 |
| 不可 | 60 点未満           | 学修到達目標を達成していない。    | 不合格 | 0 |

※上記により評価が難しい授業科目は、合又は不可の評語によって表し、合を合格とし、不可を不合格とする。

- (4) 教育課程を通した学修成果を、ラーニング・ポートフォリオ、学士力項目の達成状況（ルーブリック評価等）及び各授業科目の成績を用いて総合的に評価する。
- (5) 成績評価の結果は、評価分布等を使用して定期的に点検を行い、必要に応じて教育方法等の改善を行う。

## アドミッション・ポリシー

### 【求める学生像】

### 【教育目的と入学後の学習に必要な能力や適性等】

コスメティックサイエンス学環では、コスメティックサイエンス及び関連する学問領域において、多様な社会的要請に応えうる深い専門性と幅広い素養を身に付け、国内外での化粧品及び関連産業の発展に貢献する人材を養成することを目的とします。コスメティックサイエンス学環のカリキュラム編成と本カリキュラムに適応するために必要な入学時の能力や適性等及び入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組みは以下の通りです。

| カリキュラム編成               | カリキュラムに適応するために必要な入学時の能力や適性等                                                                                                       |
|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教養教育科目（インターフェース科目を除く。） | 自然、文化、社会に関する基礎的な知識を修得するために、専門に関する特定の教科や科目に留まらない幅広い知識や考え方を身に付けておくとともに、外国語科目（英語）を履修するための基本的な英語の学習力が必要です。                            |
| 教養教育科目（インターフェース科目）     | 現代社会の諸問題との接続を意識した問題発見能力や解決能力を修得するために、現代的な課題や事象に対する興味・関心だけでなく、学生同士のグループ学習やプレゼンテーションなどを含むアクティブ・ラーニングを積極的に行っていくための主体的な行動力や学習態度が必要です。 |
| 基礎科目                   | 理数系の基礎学力を修得するために、高等学校で履修する数学、物理、化学、生物の基本的理解と、理学分野に対する興味・関心を有していることが必要です。                                                          |
| 専門科目（理学系・農学系）          | コスメティックサイエンスの知識の習得に必要な、化学と生物の基礎的な分野の理解と実践力を養います。そのため、高等学校で履修する化学及び生物の基礎的理解と応用力が不可欠                                                |

|                     |                                                                                                                                                                                                                                      |
|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                     | です。                                                                                                                                                                                                                                  |
| コア科目(基盤融合科目・実践研究科目) | 有機化学と生化学を基礎として、コスメティックサイエンスの視点から物質の安全性、開発過程、製造工程などを通して体系的に理解します。それまでに学んだ他の専門科目の内容を十分に習得しておく必要があります。また、コスメティックサイエンスのプロフェッショナルとして課題を発見し解決する能力、及び課題解決につながる協調性と指導力を修得するために、演習や実験を通してチーム作業や問題解決型学習を行いますので、主体的な行動力や他の学生とのコミュニケーション能力が必要です。 |
| 学環周辺科目              | コスメティックサイエンス分野と社会との接続を学んでいくためには、倫理観や責任感、未知なるものへの探究心や想像力、積極的な行動力や発信力が求められます。                                                                                                                                                          |
| 卒業研究                | 3年次までの学習成果を踏まえ、指導教員の下、総合的な学習を通して自ら研究を計画・遂行していく能力を身に付けるために、3年次までの教育課程で十分に学習できていることが前提となります。なお、卒業研究は少人数形式で行うため、積極的に議論へ参加する態度や、周囲とのコミュニケーションを通じて、学習・研究活動を活性化できるような能力や姿勢を持っていることは有効です。                                                   |

#### ＜入学志願者に求める高等学校等での学習の取り組み＞

コスメティックサイエンスは、化粧品の原料を主とするさまざまな物質や材料の構造や機能の関係性・安全性を明らかにするために、それらを詳細に調べ、新しい物質の合成や分析を行います。そのため、既存物質の特性を正確に把握し、必要な仮説と検証実験、そして得られた結果の論理的説明が求められます。このようにコスメティックサイエンスを専門的に学ぶためには、高等学校で学習する化学の基本事項を十分に理解していることが必要です。また、実験等で取得したデータ解析には、計算能力や数学的思考力が求められ、物質の生化学的性質を理解するためには生物学の知識が必要となります。したがって、高等学校で学習する数学、生物の基礎学力は、コスメティックサイエンスを専門的に理解するためには欠かせないものです。さらに、新しい知識や技術を身につけるためには、外国の文献等にも目を通す必要があり、基礎的な英文読解力が求められます。一方、専門科目に限らず大学の講義や演習では、情報の収集、文献読解及びレポートの作成など、情報収集力や文書作成能力が求められるため、高等学校で学ぶ国語や社会の基本的な知識や考え方を修得しておくことが必要です。

上記のことに加え、学環の特徴を生かし、様々な学問分野の専門知識を身につけ、複眼的視点から本学環の教育・研究活動を活性化できる「主体的に学ぶ態度」をもった学生を歓迎します。

#### 【入学者選抜の基本方針】

入学志願者の基本的人権を尊重し、公正かつ妥当な方法により多様な選抜を実施します。そして、以下に示す大学入学後の学習に必要な能力や適性等を多面的・総合的に判定し、合

格者を決定します。

本学環で実施する選抜方法の目的と概要は以下のとおりです。

| 選抜方法 | 目的と概要                                                                          |
|------|--------------------------------------------------------------------------------|
| 一般選抜 | 入学の機会を広く保障するために、大学受験資格を有する全ての者を対象とし、「前期日程」と「後期日程」の入試区分により、入学者を選考します。           |
| 特別選抜 | 一般選抜では評価が難しい多様な能力や資質を有し、本学環への志望動機が明確で意欲的な入学希望者を対象とし、「総合型選抜」の入試区分により、入学者を選考します。 |

【入試で評価する入学後の学習に必要な能力や適性等】

- ① 高等学校で修得すべき幅広い教科・科目の知識・技能と、これらを踏まえた基本的な思考力・判断力
- ② 専門分野を理解するために必要な数学、理科に関する知識・技能と、これらを踏まえた数理的かつ科学的な思考力・判断力・表現力
- ③ コスメティックサイエンスの専門分野に対する強い興味・関心及び主体的に学び続けようとする意欲と態度
- ④ 自ら学びを深めようとする行動や姿勢を通して、本学環の教育・研究活動を活性化できる可能性

| 入学後の学習に必要な能力や適性  |            |         | ①                 | ②  | ③      | ④   |
|------------------|------------|---------|-------------------|----|--------|-----|
| 学力3要素との対応        |            |         | 「知能・技能」<br>「思考力等」 |    | 「主体性等」 |     |
| 選<br>抜<br>方<br>法 | 前期日程       | 共通テスト   | 74                | ○  |        |     |
|                  |            | 個別テスト等  | ○                 | 26 |        |     |
|                  |            | 特色加点    |                   |    | ☆      | ☆   |
|                  | 後期日程       | 共通テスト   | 70                | ○  |        |     |
|                  |            | 個別テスト等  | ○                 | 30 |        |     |
|                  |            | 特色加点    |                   |    | ☆      | ☆   |
|                  | 総合型<br>選抜Ⅱ | 共通テスト   | 95                | ○  |        |     |
|                  |            | 志望理由書   |                   |    | (5)    | (5) |
|                  |            | 活動実績報告書 |                   |    |        |     |
|                  |            | 調査書     | ○                 |    |        |     |

i. 数値は、各入試区分で評価する重み（総合点に対するおおよその各配点のウエイト[%]）

ii. ○は、間接的に評価したり、内容を確認するもの

iii. ☆は、加点評価

#### (4) 3つのポリシーとの関係性

コスメティックサイエンス学環のディプロマ・ポリシーでは、自律的に学ぶ姿勢、原理・原則を理解する力、アイデア創出能力、問題発見能力、課題設定能力、構想力、モデル化能力、課題解決・遂行能力を身に付けさせ、社会の変革に柔軟に適應できる幅広い教養と生命科学の基礎力を土台として、学際的視点からコスメティックサイエンスに関連した広い分野で活躍できる科学・技術の専門的素養を持つ人材を養成することを目的としている。これを踏まえて、基本教養科目、基盤融合科目、初期の専門教育科目において修得する幅広い分野の知識を基礎力として、課題発見、設定、解決力につながる力を本課程で設定している大学入門科目、インターフェース科目、基盤融合科目、専門教育科目、卒業研究を通じた教育プログラムを学修することで養い、所定の単位を修得したものに学位を授与することとしている。

この学位授与の方針を具現化するためのカリキュラム・ポリシーとして、コスメティックサイエンス分野の専門的な知識をもって活躍するための、(1)「基礎的な知識と技能」については教養教育科目及び専門教育科目のコア科目、(2)「課題発見・解決能力」を教養教育科目における「大学入門科目」、「インターフェース科目」、及び専門教育科目のプロジェクト型演習の「コスメティックサイエンスPBL」や専門教育科目、(3)「個人と社会の持続的発展を支える力」を教養教育科目及び学環周辺科目や卒業研究によりそれぞれ養える科目配置としている。

上記の2つのポリシーに基づく教育課程への入学生に求められる学生像としては、コスメティックサイエンスを専門的に学ぶために高等学校で学習する化学や生物の基本事項を十分に理解していること、データ解析に必要な計算能力や数学的思考力、外国の文献等の読解のための英語力を身につけていることが望ましい。特に入学後に様々な学問分野の専門知識を身につけ、複眼的視点から本学環の教育・研究活動を活性化できる「主体的に学ぶ態度」をもった学生を求めている。

#### (5) 研究対象とする学問分野

コスメティックサイエンス学環は、化粧品にかかわる教育と研究及びそれだけにとらわれず化粧品という語句を超えたニーズに対応をするための専門的な教育と研究を対象とする。本学環では、化学、生物学、薬学、皮膚科学、材料科学、統計学、情報学などの多岐にわたる学問分野を統合し、化粧品の成分解析、製剤技術、効果評価、安全性試験、規制対応などを包括的に学ぶ。特に、ナノテクノロジーやバイオテクノロジーを活用した革新的な製品開発、持続可能な原材料の利用、環境への影響評価など、現代の課題に対応する研究を推進する。また、消費者の多様なニーズに応えるためのマーケティング戦略や、国際的な規制

動向の理解も重視する。これにより、学生に理論と実践を融合させた高度な専門知識と技術を習得させ、グローバルな化粧品業界で活躍できる人材を育成する。

## ② 学部・学科等の特色

本学環は、連係協力学部である理工学部及び農学部から配置された基幹教員を中心として運営し、理工学・農学分野では補いきれない学問領域を他の4学部（医学部、芸術地域デザイン学部、経済学部、教育学部）の協力を得て補完することにより、全学的な連携を基盤とする教育プログラムである。本プログラムでは化粧品成分である化学物質の理解に留まらず、化粧品（化学物質）の安全性、生理活性、マーケティング、歴史・文化、デザインスキルなどを分野横断的に学ぶことができ、この多角的な学びにより、分野間のシナジー効果を通じた高い教育効果が期待できることを特色としている。また、佐賀県や唐津市が進める「コスメティック構想」【添付資料18】との連携を強化し、本学環がコスメティックサイエンスの教育・研究拠点となる役割を担う。これにより、佐賀大学のプレゼンスを向上させるとともに、佐賀をはじめとする北部九州地域の活性化にも貢献する。

入学定員は30名であり、これは理工学部から10名（約2%）、農学部から20名（約11%）を割り当てる。既設学部の大幅な改組を伴うことなく、それぞれの分野の授業科目や教育リソースを活用した教育プログラムを展開する。また、より高度な研究人材の育成を目指し、本学環の完成年度である令和11年度には本学環を基盤とした大学院の設置を計画中である。

本学環の専門教育科目は「基礎科目」「専門科目（理学系、農学系）」「コア科目」及び「学環周辺科目」（詳細は④教育課程の編成の考え方及び特色の（3）科目区分で説明）に分類されるが、化粧品の成分や製造・開発法を学ぶ「コア科目」と、様々な観点から化粧品の理解を深めていくための「学環周辺科目」がカリキュラムの特色として位置付けられる。

### ・コア科目

化粧品の成分や製造・開発など、コスメティックサイエンス分野に必要な知識やスキル、課題発見・探究能力を修得するための本学環の中心となる科目区分である。有機化学と生化学を基礎として、コスメティックサイエンスの視点から物質の安全性、開発過程、製造工程などを通して体系的に理解する、応用的な科目としての位置付けとなる。

### ・学環周辺科目

化粧品（化学物質）の関連法規、薬理関係、歴史・文化、デザイン、マーケティングなど、コスメティックサイエンスを多角的に理解するための科目区分である。これらは「コア科目」で修得した専門知識をもとにさらに深い学びを促進するものであり、学際的な視点からシナジーやイノベーションの創出が期待される。

その他、全学共通の教養教育科目の特色として「インターフェース科目」と「データサイエンス教育」があげられる。「インターフェース科目」は、佐賀大学の特色の1つであり、専門知識・技術・技能を活用して現代社会が抱える課題を解決する能力や、社会で活躍するために必要な力を養成するために全学部で導入されている科目である。「データサイエンス

教育」は、「数理・データサイエンス AI 教育プログラム認定制度リテラシーレベル」に認定された科目が全学部に必修科目として設定されており、データリテラシーの強化や AI 活用の基礎を身につける教育を提供している。【添付資料 19】



### ③ 大学、学部・学科等の名称及び学位の名称

組織名称：コスメティックサイエンス学環 School of Cosmetic Science

学位：学士（学術） Bachelor of Sciences

#### （１）組織名称を当該名称とする理由

「Cosmetic Science」は、生体との相互作用の観点から、化粧品及び化粧品用医薬品に含まれる化学物質や天然物資源の単離精製・合成、その化学的な物性評価と生理活性評価など、化粧品及び化粧品用医薬品成分である化学物質の有益性や安全性に関して学問分野の領域を超えて幅広い観点による基礎から応用までをカバーする研究領域である。和名の「化粧品」では生理作用や薬効をもたない狭義な分野の印象を与えるのに対し、より広義な学問分野を取り扱う本学環においては、「Cosmetic Science」という名称が適切である。

「コスメティックサイエンス」学環は、複数の学問分野を統合、融合した学際的な教育・研究が特徴であり、化学、生物学、皮膚科学、薬学、工学など、さまざまな分野の知識を統合して学ぶカリキュラム編成である。

海外の大学においては、アメリカ（シンシナティ大学、ロングアイランド大学など）やイギリス（サンダーランド大学、レディング大学、ブラッドフォード大学など）をはじめ多くの国においてコスメティックサイエンス分野を独立した学問として扱い専門的な教育プログラムを設けている。また、この名称を含む学術論文誌として、国際学術論文誌の「International Journal of Cosmetic Science (1979～)」「Current Cosmetic Science (2022～)」、国内専門誌の「Cosmetic Science (2024.6～)」などが発刊されており、コスメティックサイエンスに関する最新の研究成果を発表する場として広く認知され、世界中の研究者や専門家が投稿し、査読を経て高品質な論文が掲載されている。【添付資料 20】

さらに、Society of Cosmetic Chemists (SCC) や International Federation of Societies of Cosmetic Chemists (IFSCC) などの専門組織も、「コスメティックサイエンス」の普及と発展に大きく貢献しており、これらの組織が国際会議やシンポジウムを開催し、研究者や業界の専門家が最新の知見を共有し、ネットワークを構築する場を提供することにより、「コスメティックサイエンス」のグローバルな標準化と進歩が促進されているなど、国際的にも理解と認知度が高まっている。

このように、国際的にもグローバルな視点で教育と研究が推進されており、海外からの学生や研究者の受け入れ、国際共同研究の促進が期待される。近年の新刊発刊もあって「コスメティックサイエンス」という名称は、新しい研究分野や技術の開発を促進する学問領域であることを示しており、特に、自然由来の成分や環境に優しい製品の研究開発など、現代の消費者ニーズに応えるための革新的なアプローチの推進に寄与するものである。

本学環が育成する人材が活躍する産業の1つとなる化粧品産業は、製品の安全性、効果、持続可能性に関する高度な知識と技術を必要としており、「コスメティックサイエンス」という名称は、「化粧品」という語句の意味を超えたこれらのニーズに対応するための専門的な教育と研究を提供する学環であることを明確に示している。また、化粧品に関心を持つ生徒・学生のみならずその周辺領域をカバーしているという点で魅力的なものであり、将来のキャリアパスを明確にし、専門的な知識と技術を習得するための学環であることを強調できる。

以上の理由から、学環の名称は、「Cosmetic Science」で取扱う分野を意識し、学問的かつ産業的に国内外での認知度と信頼性を高める「コスメティックサイエンス」が妥当である。

本学における学部等連係課程実施基本組織の名称を決めるにあたり、令和3年度に学部等連係課程を設置した岐阜大学の「社会システム経営学環」をはじめ、和歌山大学の「社会インフォマティクス学環」、熊本大学の「情報融合学環」など、全国的に学部等連係課程実施基本組織に「学環」という名称が使用されていることから、より社会に浸透した名称を付けることが、受験生等を混乱させないと考えたため、「学環」の名称を使用する。

なお、学部や学科等の名称に「コスメティックサイエンス」を用いるのは、本学が国内で初めてであることから、本学環のカリキュラムや教育内容、進路先などについては、ホームページ等での周知をはじめ、オープンキャンパス、進学説明会などの広報活動を広範囲に行い、高校生やその保護者をはじめ社会全体の認知度を向上させる取り組みを積極的に行う。

## （２）学位の名称と当該学位とする理由

コスメティックサイエンスは、化学、生物学、皮膚科学、薬学、工学など多岐にわたる学問分野を統合した学際的な領域であり、化粧品の開発、製造、評価、そして消費者への影響を科学的に探究することを目的とした学問分野である。

コスメティックサイエンスは高度な科学的知識と技術を必要とする分野であり、化粧品の開発には、化学的な成分の理解や生物学的な反応の予測、皮膚科学に基づく安全性評価などが不可欠であり、これらの知識を体系的に学び、実践する能力を証明するための学位は学士（学術）が適しており、学生がこれらの複雑な知識を深く理解し、応用する能力を持っていることを示す証となる。

また、研究者、開発者、技術者、品質管理者、マーケティング専門家など、さまざまな職種での活躍が期待され、学術的な背景を持つことにより、これらの職種での専門性を高め、個々のキャリアパスの多様性を広げることが可能となる。例えば、研究者としては新しい成分の開発や効果の検証を行い、開発者・技術者としては市場のニーズに応じた製品の設計を担当する。品質管理者としては製品の安全性と品質を保証し、マーケティング専門家としては科学的根拠に基づいた製品のプロモーションを行う。

さらに、国際的な観点からみると、学士（学術）にすることは、化粧品業界がグローバルな市場であり、国際的な視点と高度な専門知識が求められ、国際的な研究機関や企業との連携が容易になり、グローバルなステージでの活躍が期待されるなど、国際的な競争力を持つ人材の育成にも寄与する。加えて、化粧品は日常生活に密接に関わる製品であり、その安全性と効果に対する信頼が重要である。学術的な学位を持つ専門家が関与することで、消費者に対して科学的根拠に基づいた情報提供が可能となり、製品の信頼性が高まる。

以上、科学的知識と技術の体系的な学びを促進するとともに専門性を高め、国際的な競争力を持つ人材の育成に寄与し、社会的な信頼性と認知度の向上にもつながると考え、本学環の学位は学士（学術）とする。

英語名称については、国内外において広く用いられており、国際通用性がある Bachelor of Sciences とする。

なお、本学環の卒業者には、連係協力学部である理工学部（理学）・学士（工学）、農学部（農学）とは異なる学士（学術）を授与する。佐賀大学教授会規則【添付資料21】において、「教授会は、学長が学生の卒業及び学位の授与に関する事項を決定するにあたり意見を述べるものとする。」と規定されており、本学環においては実施主体となるコスメティックサイエンス学環教授会が意見を述べることとなる。本学環は連係協力学部から独立して、卒業者への学位授与に関わる。

#### ④ 教育課程の編成の考え方及び特色

##### (1) 教育課程の基本的な考え方

佐賀大学は、学生が自律的に学ぶ姿勢、問題発見能力、課題設定能力、課題解決・遂行能力を身につけることを目指している。本学環では、これらの能力を基盤に、社会の変革に柔軟に適応できる幅広い教養と生命科学の基礎力を育み、学際的な視点からコスメティックサイエンスに関連する幅広い分野で活躍できる科学技術の専門的素養を備えた人材を養成することを目的としている。専門教育科目は、基礎科目・専門科目（理学系）・専門科目（農学系）・コア科目・学環周辺科目の区分とし、各科目区分の学修順序は概ね上記区分の並びのとおりである。1年次前学期は理学系基礎、1年次後学期は化学・生物分野の基礎を重点的に学ぶ。2年次にはコスメティックサイエンスの専門分野を学び、3年次には分野横断的な学びを深める。そして4年次に、それまでの学びを集約して卒業研究に取り組むカリキュラム設計としている。

##### (2) カリキュラム・ポリシー

①設置の趣旨及び必要性の(3)に記載のとおり、体系的な教育課程を編成している。

##### (3) 科目区分

###### 1) 教養教育科目

教養教育科目の教育課程編成の方針は、学生に幅広い知識と視野を身につけさせると同時に専門課程の学修の基礎となる学問を習熟させることを目的とする。まず、大学入門科目、外国語科目、基本教養科目（自然科学と技術の分野、文化の分野、現代社会の分野）、インターフェース科目（環境、文化と共生、生活と科学、人間と社会、医療福祉と社会、地域・佐賀学）などコスメティックサイエンスの基礎となる自然科学や社会科学に関する学問を十分に修得させることで、基礎学問の知識を養う。次に、批判的思考力や問題解決能力を育成するためのディスカッションやプロジェクトベースの学習を導入する。また、グローバルな視点を持つ人材を育成するために、異文化理解や国際交流プログラムを積極的に取り入れる。さらに、情報リテラシー科目（講義及び演習）を履修させ、現代社会で必要とされる情報に関する能力を涵養する。これらの方針に基づき、1年次～2年次に学生に履修させることで、学生が自らの興味や関心に応じて柔軟に学びを深めることができる教育環境を整備する。

###### 2) 専門教育科目

###### I. 基礎科目

基礎科目は、理工系カリキュラムの土台となる数学、理科、データサイエンス等を学ぶための科目群であり、すべて必修科目として以下の内容で構成される。

1年次：微分積分学、線形代数学、物理学概説、化学概説（主要授業科目）、生物学

概説（主要授業科目）、情報・統計学

3 年次：学術英語、化学情報処理（主要授業科目）、化学物質演習

1 年次に配置される科目は、専門教育科目の履修に必要な数学、物理、化学の基礎学力を育成することを目的とする。少人数教育の利点を活かし、入試区分にかかわらず無理なく学修を進められるよう配慮した教育を実施する。3 年次に配置される「学術英語」は、科学系英語論文の読解に必要な専門用語や論文構成・書式を習得するための科目である。また、「化学情報処理」では、化学系のデータベース検索や科学技術ソフトウェアの活用スキルを身につける。また「化学物質演習」は、卒業研究等で取り扱うことが想定される基本的な化学物質の性質や取り扱い上の注意点などを、演習形式で学ぶ。コア科目の履修に直結する「化学概説」「生物学概説」「化学情報処理」は、特に重要な主要授業科目として位置付ける。

## II. 専門科目（理学系・農学系）

専門科目は、コア科目の履修に必要な化学・生物学の知識を習得するための科目群であり、理学系科目と農学系科目に大別される。基礎的な 7 科目は必修科目として 1 年次後期から 3 年次にかけて履修し、その他の科目は選択科目として 2 年次から 3 年次にかけて履修する。必修・選択の合計 22 単位の修得を卒業要件とし、必修科目のうち 5 科目を主要授業科目として位置付ける。

### 理学系科目（必修 6 単位＋選択 4 単位）

必修：無機化学、物理化学（主要授業科目）、分析化学Ⅰ（主要授業科目）

選択：分析化学Ⅱ、量子化学、溶液化学、生物無機化学、化学熱力学、有機機器分析化学

### 農学系科目（必修 8 単位＋選択 4 単位）

必修：植物生理学、植物資源学（主要授業科目）、分子生物学（主要授業科目）、酵素化学（主要授業科目）

選択：食品衛生学、栄養化学、遺伝学、植物育種学

## III. コア科目

コア科目は、専門分野の基礎をコスメティックサイエンスへ発展させた科目群であり、化粧品の成分や構成、分析・評価法、製造・開発など、コスメティックサイエンス分野に必要な知識やスキルを修得することを目的としている。「コスメティックサイエンス PBL」「コスメ開発論Ⅰ・Ⅱ」では、化粧品製造や開発に携わる企業の研究者をゲストスピーカーとして招き、実学的な講義を実施する予定である。これにより、理論だけでなく、実際の産業現場に基づく知見を深めることができる。1 年次後学期から 3 年次後学期までの各学期には PBL（Project Based Learning）や実験科目を配置し、4 年次には卒業研究を実施する。これらを通じて、実践的な実験・研究を行い、課題発

見能力や探究能力を養う。また、コア科目はすべて必修科目であり、主要授業科目として位置付けられている。

講義科目：コスメティックサイエンス概論、有機化学Ⅰ・Ⅱ、生化学Ⅰ・Ⅱ、機器分析学、コロイド・界面化学、天然物化学、微生物学、皮膚科学、生理学、コスメ開発論Ⅰ・Ⅱ

実験・演習科目：コスメティックサイエンスPBL、コスメティックサイエンス実験Ⅰ～Ⅳ、卒業研究

#### Ⅳ. 学環周辺科目

学環周辺科目は、化粧品（化学物質）の関連法規、薬理関係、歴史・文化、デザイン、マーケティングなど、コスメティックサイエンスを多角的に理解するための科目群である。これらの科目はコア科目の修得後に履修することで教育効果が高まるため、主に2年次から3年次での履修を想定している。必修科目には、研究倫理や法規関連を学ぶ「科学技術者倫理」と「知的財産法」に加え、化学物質の人体への作用や安全性に関係する「分子薬理学」「毒性学」がある。また、学際的な視点からイノベーションの素養を育むことを目的とした科目群を選択科目とし、合計9単位の修得を卒業要件としている。

必修：科学技術者倫理、知的財産法、分子薬理学、毒性学

選択：体内動態論、コスメ文化論、食物学、マーケティングマネジメント、デザインプロジェクト演習、企業インターンシップS、企業インターンシップL

（４）教育課程の編成の体系、カリキュラム・ポリシーと教育課程（各授業科目）の整合  
コスメティックサイエンス学環のカリキュラム・ポリシーとして、生命科学を基盤としたコスメティックサイエンス分野の専門的な知識を身に付けていくために、化学及び生物学を基盤とした体系的な科目を配置し、その上で化粧品の品質、安全性や品質管理に関わる知識を身に付けるための専門的な科目を構成・配置する。

「コスメティックサイエンス」は、生体との相互作用の観点から、化粧品及び化粧品用医薬品に含まれる化学物質や天然物資源の単離精製・合成、その化学的な物性評価と生理活性評価など、化粧品及び化粧品用医薬品成分である化学物質の有益性や安全性に関して学問分野の領域を超えて幅広い観点で基礎から応用までをカバーする学問領域であり、化学及び生物学を中心に、皮膚科学、薬学、工学など、複数の学問領域への包括的で深い理解が求められる。このためのカリキュラム編成として専門教育科目のコア科目を基軸に、幅広い分野を体系的に履修するように設計している。

段階性として1年次は高校で学んだ知識をベースに大学入門科目、基本教養科目などといった教養教育科目でリベラル・アーツとしての幅を広げていくとともに、専門教育科目の基礎となる物理学、化学、生物学概説により十分に理解していき、数学的知識の厚みを増す

ための科目として微分積分学、線形代数学、情報・統計学を学ぶ。1年次後学期から3年次にかけては、有機化学Ⅰ・Ⅱ、コロイド・界面化学、生化学Ⅰ・Ⅱ、天然物化学、生理学、皮膚科学など講義主体の科目に加えて、実習実験科目としてコスメティックサイエンス実験Ⅰ～Ⅳ、コスメティックサイエンスPBLなどを配置し、コスメティックサイエンス分野の専門的な知識を学ぶためのコア科目として順次性と体系性をもつように編成している。コア科目の履修に必要な化学・生物学の修得のための専門教育科目としては理学系科目に無機化学、物理化学、分析化学など、農学系科目として植物生理学、植物育種学、遺伝学などを配置している。さらに学環周辺科目として科学技術者倫理、知的財産法を2年次から順次履修することにより知財や倫理観を意識づけし、企業インターンシップなどにつなげられるようにしている。学環周辺科目ではほかに薬理関係、歴史・文化、デザイン、マーケティングなど、コスメティックサイエンスを多角的に理解するための科目群として医薬系科目の毒性学、人文系科目のマーケティングマネジメント、デザインプロジェクト演習、コスメ文化論などを配置しており、これらの科目は本学の理工学部・農学部にはない学環の特色となっている。

なお、カリキュラム・ポリシーと教育課程の関係については、カリキュラム・ポリシーの1. 教育課程の編成に記載しているところだが、詳細については、別添資料に記載のとおりである。【添付資料22】

## ⑤ 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

### (1) 教育方法

各授業科目は、内容に応じて講義、演習、実験、実習及びそれらを組み合わせた授業形態で実施する。佐賀大学は、学生の主体的な学習を促すために全ての授業科目でアクティブ・ラーニングの要素を段階的に取り入れた教育を実施している。また、シラバスには毎週の授業に対応する自宅学習内容や演習課題を明記し、2単位の講義科目であれば、授業（30 時間）＋自宅学習（60 時間）＝90 時間相当の学習時間を確保することに努めている。自宅学習の状況は、講義中の小テストやレポートの他に、Moodle や Teams 等の学修管理システム（LMS）を活用して確認する。実験や演習では、定員 30 名を 5～6 名のグループに分け、個々の学生の習熟度を確認しながら少人数教育を実施する。

### (2) 履修指導

本学では学習支援に関する以下の制度を設けている。

#### 教務オリエンテーション

入学時のオリエンテーションでは、佐賀大学及び本学環の教育理念・目標や本学環のカリキュラムを、カリキュラムツリーやカリキュラムマップを用いて分かりやすく説明し、4 年間の学習イメージに関する理解を促す。各年度の初めにも、教務担当教員によるオリエンテーションを実施し、当該年度の履修に関する注意を促す。

#### チューター制度

各学年 3～4 名の学生に対し、基幹教員 1 名をチューター教員として配置し、学期はじめに個別面談を実施する。面談では、次項で説明するラーニング・ポートフォリオや、教学 IR データに基づく LAP を参照し、学修履歴や状況を確認しながら個別の就学指導を行う。チューター教員は、学習指導に限らず、必要に応じて学生の相談窓口として対応し、相談内容に応じて、各々の専門相談窓口に学生を案内する。

#### ラーニング・ポートフォリオ、ラーニング・アナリティクス・プラットフォーム

##### (LAP)

全学生は、学修状況の記録として各学期にラーニング・ポートフォリオを作成する。ラーニング・ポートフォリオは前述のチューター制度と連動しており、各学期開始時に前の学期の自己評価と当該学期の学習・行動目標を入力し、この内容に基づいてチューター面談を受ける。LAP は現時点での修得単位、GPA 推移、出席状況、学科内の成績分布などを経年で比較・分析できる本学独自の学修状況分析ツールで、自己評価やチューター面談の際に資料として活用される。

#### オフィスアワー



各教員は学期ごとにオフィスアワーを定め、学生の質問や相談に対応する時間を確保している。各教員のオフィスアワーは、教務ガイダンス資料や各授業科目のシラバスにより学生に公開される。

#### GPA

授業科目の成績評価に4～0のGrade Pointを付し、そのGrade Pointに各科目の単位数を乗じた合計を、履修した科目の総単位数で除した平均値をGPAとして定めている。前述のLAPシステムで、学生は自身のGPA、教員はチューター担当学生のGPAを確認することができる。

#### CAP 制度

単位制度の実質化に向けた履修登録の上限設定（CAP 制度）が教育プログラムごとに設定されている。本学環における1学期の履修登録上限単位数は21単位としており、15週間での学習量を十分に確保できるよう定めている。また、GPAが一定基準を越える成績優秀者に対しては上限を緩和し、学習意欲の高い学生にはより高度な学びを展開できるよう配慮している。

#### （3）研究指導

佐賀大学では、本学の学士課程で学習する学生が、卒業までに身につける能力を「佐賀大学 学士力」【添付資料 23】として定め、研究指導は、学士力の完成に強く関与するものという認識の下で、本学環での「専門的な知識と技能に基づく課題発見・探究能力の育成のための科目」の位置づけである、1年次の「コスメティックサイエンスPBL」と4年次の「卒業研究」の中で研究指導を行う。

「コスメティックサイエンスPBL」は、少人数のグループ単位で課題研究に取り組む。与えられた素材のみを使用して指定された化粧品を作成することを課題とし、教員の指導の下で調査・ディスカッションを重ねながら、グループ単位で実験に取り組む。

その成果をまとめてプレゼンテーションを行うとともに、設定されたルーブリックに基づいて自身の課題発見・探究能力を自己評価する。

「卒業研究」は個人単位での研究であり、3年次終了時に指導教員を選択し、教員と協議して卒業研究テーマを設定して通年で取り組む。研究遂行に必要な専門知識やスキルを修得するための研究室ゼミや研究論文の抄読会、そして研究進捗状況の報告会なども包括して全体として8単位相当と定め、これらの学修の成果をルーブリックを活用して、総合的に評価して単位を付与する。この「卒業研究」を通して佐賀大学学士力を完成させ、コスメティックサイエンス分野における産学官の動向への深い理解と関連分野への多面的な視点を持った人材の育成を行う。

#### (4) 修了要件

本学環の修了要件は、所定の期間在学して所定の要件で教養教育科目を 28 単位以上、かつ専門教育科目を 96 単位以上、合計 124 単位以上を修得したものとする。【添付資料 24】

佐賀大学は平成 19 年 12 月に設立された「大学コンソーシアム佐賀」に加盟しており、加盟大学である西九州大学、九州龍谷短期大学、佐賀女子短期大学、西九州大学短期大学部、放送大学佐賀学習センターと単位互換協定を締結し、各大学が提供可能な科目を共通教育科目として定めている。【添付資料 25】本学環では、カテゴリが教養教育科目であるものは卒業要件科目である「基本教養科目」、カテゴリが専門教育科目であるものは「自由科目」として卒業要件外として扱う。また、入学前の既修得単位については個別に単位認定を行う。

⑥ 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合の具体的計画

本学では、佐賀大学学則第18条第1項に、授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとして規定されている。同条第2項において、前述の授業の方法以外に、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができることを規定している。

また、佐賀大学学則の下に定める佐賀大学における多様なメディアを高度に利用して行う授業に関する要項において、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外の場所で履修させる授業の実施方法について、必要な事項を定めている。【添付資料26】

当該要項において、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室以外で行う授業科目を開講する場合は、多様なメディアの活用方法等を確認することとしている。

オンデマンドの講義においては、学生にはオンデマンド教材による学習後にリアクションペーパーやレポートの提出を求めることにより学習状況を確認するとともに、学生の質疑を集約し、教員は提出されたリアクションペーパーやレポートの添削指導を通して、質疑の応答や指導を行う。また、リアクションペーパーやレポートの内容を集約し、学生に周知することで、学生同士の意見交換の機会とする。同時かつ双方向にリアルタイムで行われるオンライン講義においては、質疑応答や学生同士の意見交換の機会を確保し、対面授業と同様の授業を実施する。

⑦ 企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

企業インターンシップS・Lは佐賀県または北部九州の企業を想定している。

唐津市、佐賀市、鳥栖市、神崎市には関連する化粧品関連企業が合計10社以上存在し、久光製薬、大石膏盛堂、三省製薬、東洋ビューティなどを中心にして品質管理などの実習活動を行う予定である。

また、県内企業に加えて、全国規模で展開する化粧品関連企業（例：岩瀬コスファなど）もインターンシップの対象とし、より多様な実習機会を提供する。これにより、学生は地域企業の強みを理解するとともに、全国レベルでの品質管理や商品開発、マーケティング戦略などについても学ぶことができる。

⑧ 取得可能な資格

本学環で取得可能な資格は、毒物劇物取扱責任者、化粧品総括製造販売者責任者申請資格である。

## ⑨ 入学者選抜の概要

### (1) アドミッション・ポリシー

①設置の趣旨及び必要性(3)に記載のとおり、各入学者選抜方法と整合したポリシーを定めている。

### (2) 選抜方法と募集人員

本学環の入学試験ではアドミッション・ポリシーに相応しい人材を選抜するため、一般選抜のほかに総合選抜型Ⅱを実施する。選抜方法としては、大学入学共通テスト、個別学力検査、調査書などを組み合わせて入学志願者の能力や資質を総合的に評価する。【添付資料 27】

#### 1) 選抜方法

##### 【一般選抜】

##### ① 前期日程

「知識・技能」については、大学入学共通テストを利用して高等学校の教育課程の教科・科目に関する総合的な学力を、個別学力検査により、「思考力・判断力・表現力」を総合的に判定する。また「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」については調査書等により評価し、それらの判定結果から入学者を選抜する。募集人員は18名とする。

##### ② 後期日程

「知識・技能」については、大学入学共通テストを利用して高等学校の教育課程の教科・科目に関する総合的な学力を、個別学力検査により、「思考力・判断力・表現力」を総合的に判定する。また「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」については調査書等により評価し、それらの判定結果から入学者を選抜する。募集人員は5名とする。

##### 【特別選抜（総合選抜型Ⅱ）】

「知識・技能」については、大学入学共通テストを利用して高等学校の教育課程の教科・科目に関する総合的な学力を判定する。書類審査では、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」について志望理由書・活動実績報告書・調査書により判定し、それらの判定結果から入学者を選抜する。募集人員は7名とする。

#### ⑩ 教育研究実施組織等の編成の考え方及び特色

本学環の人材養成の目的であるコスメティックサイエンス分野においては化学、生物学を中心に、皮膚科学、薬学、工学など、複数の学問領域が融合することで、より包括的で深い理解が可能となる。佐賀大学は6学部と6研究科を有する県内唯一の国立総合大学として多分野の教育リソースを有しており、理工学部と農学部を中心として、全学横断的に全学部から教育研究に参加する。学環は国立大学法人佐賀大学基本規則の中で学部相当の教育研究等組織として規定され理工学部と農学部から選出された基幹教員を配置する。理工学部と農学部が主体となるのは、有機化学、無機化学、物理化学、化学熱力学、溶液化学、生化学、微生物学、分子生物学、植物生理学、食品衛生学、酵素化学、遺伝学を専門とする学内教員の適切な再配置により前述の多角的なアプローチを実現する教育体制を整備するためであり、その他の学部教員の参画をもって、より幅広い視点での教育体制の充実を図る。

本学環は本学初、また、唯一の学部等連係課程実施基本組織であり、入学定員は30名の本学で最も小さな学士課程の組織となる。本組織整備では学長のリーダーシップの下、学内資源（学長裁量経費、学長裁量スペースなど）を有効活用しながら準備を進める。特に教員配置については、連係協力学部である理工学部・農学部から専従の基幹教員6名（教授5名、准教授1名）、連係協力学部等と兼務する基幹教員8名（教授4名、准教授4名）をそれぞれ本学環の基幹教員として配置して主要科目の教育、及び学環の管理運営を行う。主要科目以外の専門科目については、全学部から参画した協力教員が講義を担当する。

連係協力学部等と兼務する基幹教員については、「コスメティックサイエンス学環専任教員の業務管理について」により適切にエフォート管理を行うことで、特定の教員への過度な業務負担を抑制し、教育研究活動に支障が生じることはない。【添付資料28】

教養教育科目は、教養教育センターが主体的に運営し、教育上主要であるコア科目（有機化学、生化学等の科目）においては、主に専任の教授、准教授で教育を行う体制である。また、実務家教員として、企業の研究者等が授業や研究に参画することにより、地域の化粧品産業との連携を強め、さらに、海外のコスメティックサイエンス関係の大学や企業、研究者と連携する際にも全学的なリソースを活用する。なお、完成年度の教員組織の年齢構成は、29歳から65歳までの者で、職位とのバランスも良好である。

#### ⑪ 研究の実施についての考え方、体制、取組

本学では生物資源開発・機器分析・放射性同位元素利用・環境安全管理に関する体制を一元化し、教育・研究を効率的に推進するための拠点施設として 総合分析実験センターを設置しており、技術職員を 11 名配置している。本センターは、コスメティックサイエンス学環でも使用する教育・研究機器の維持・管理及び他組織の教職員へのサポートを行っており、学環設置後は、学環の研究活動に協力するとともに、セミナーなどを通じて、学生への教育にも参画する。

また、研究力の向上に向けた支援を行うとともに、佐賀県を中心とする産業界や地域機関との連携の下、大学としての組織的な支援を強化するため、リージョナル・イノベーションセンターを設置している。同センターには 6 名の URA (University Research Administrator) を配置し、研究活動の企画・マネジメント、研究資源の導入促進、研究成果の活用支援を通じて、研究者の活動を支え、研究戦略の立案、外部資金の獲得支援、産学連携の推進など、多岐にわたる業務を担当する。また、研究プロジェクトの進行管理、成果の社会還元、研究倫理の遵守も含まれる。URA は、各学部・研究科及び本学環と連携しながら、研究力の強化に貢献しており、引き続き、研究支援体制のさらなる充実を図る。

#### ●URA 業務の一覧

##### ○研究戦略推進業務

- ・ 学内研究情報の把握・分析
- ・ 企業情報の把握・分析
- ・ 科学技術政策情報等の分析
- ・ アウトリーチ活動
- ・ イベント関連
- ・ 知財関連
- ・ ベンチャー創出支援
- ・ 情報収集活動・ネットワーク構築活動

##### ○産学連携推進業務

- ・ 共同研究・受託研究
- ・ 地域連携プロジェクト参画支援
- ・ 研究プロジェクト企画立案

##### ○研究推進支援業務

- ・ 科研費申請支援
- ・ 競争的研究資金申請支援

## ⑫ 施設、設備等の整備計画

### (1) 校地、運動場の整備計画

本学環の主要な利用施設としては、関係協力学部である理工学部・農学部が主に利用している佐賀大学本庄地区の理工学部 1～9 号館及び農学部 1～4 号館を共同利用する。その他、全学共用施設として、佐賀大学グラウンド（陸上競技場、サッカー場）、佐賀大学体育館、プール、テニスコートの他、佐賀大学附属図書館を共同利用する。

### (2) 校舎等施設の整備計画

本学環では講義、演習、実験、実習、研究指導などそれぞれの授業科目の内容に合わせて既設の講義室、実験室等を共同利用する。

### (3) 図書等の資料及び図書館の整備計画

佐賀大学附属図書館本館では約 46 万冊の図書を所蔵している。うちコスメティックサイエンス関連分野（化学、生物科学、化学工業等）の図書は約 13,000 冊を所蔵している。加えて、関連分野の図書資料を重点的に整備している。電子ジャーナルについては、約 25,000 タイトルを購読中であり、Scopus 等の文献データベースを利用して検索できる。またディスカバリーサービスも利用でき、幅広い情報源から必要な学術情報を統一的に検索することも可能としている。館内のラーニングコモンズとして、多目的学習スペースやグループ学習室等を設置しており、課題に応じて適切な設備が利用できる環境を提供している。なお、閲覧席数は 629 席配置している。

## ⑬ 管理運営

本学環では、佐賀大学教授会規則及び佐賀大学コスメティックサイエンス学環教授会規程【添付資料 29】に則り、定例の教授会、必要に応じて臨時の教授会を開催し、学長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり、当該事項を審議し、意見を述べるものとする。教授会構成員は、本学環の運営に携わる専任教授であり、構成員の 3 分の 2 以上の出席がなければ、議事を開き、議決することができない。

- (1) 学環長候補者の選考に関する事項
- (2) 教員（非常勤講師を含む。）の配置要望に関する事項
- (3) 教育課程の編成に関する事項
- (4) 学生の入学、卒業及び課程の修了並びに学位の授与に関する事項
- (5) 学生の転学部及び転学科に関する事項
- (6) 学生の懲戒に関する事項

また、国立大学法人佐賀大学教員会議規程【添付資料 30】に則り、教授会の下に、基幹教員で構成する教育課程の編成に係る事項を審議する教員会議を置くことと規定されているため、本学環についても学部同様、本学環の教授会の下に、本学環の基幹教員で構成され

る教員会議を置く。



#### ⑭ 自己点検・評価

本学では、教育水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育及び研究並びに組織及び運営の状況について「自己点検・評価」を実施している。過去の自己点検・評価について「大学の評価」の Web ページにて公表している。

##### 大学の評価

<https://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>

本学における「自己点検・評価」に関し必要な事項は、国立大学法人佐賀大学評価の実施に関する規則に定めるところによる。

なお、本学は、平成 21 年度、平成 27 年度及び令和 3 年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構（現独立行政法人大学改革支援・学位授与機構）による『大学機関別認証評価』を実施し、『佐賀大学の教育研究等の総合的な状況は、大学改革支援・学位授与機構が定める大学評価基準に適合している。判断の理由：大学評価基準を構成する 27 の基準をすべて満たしている。』との評価を受けており、自己評価書及び評価報告書を「大学評価」の Web ページ（上掲）にて公開している。

⑮ 情報の公表

本学では、インターネット上に大学の公式ウェブサイト을設けており、大学の理念と中期目標や計画などの大学が目指している方向性を発信するとともに、学校教育法施行規則第172条の2に定めのある教育研究活動等の状況について、以下のとおり情報を公開している。具体的な公表項目の内容等と公開しているウェブサイトアドレスは以下のとおりである。

ア 大学の教育研究上の目的及び3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に関すること

イ 教育研究上の基本組織に関すること

ウ 教育研究実施組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

エ 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

オ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

カ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

キ 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

ク 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

ケ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

（ア～ケ：<https://www.saga-u.ac.jp/koukai/education.html>）

コ その他（教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果等）

（a）教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報（佐賀大学の教育方針について・学士力・3つの方針）

（<http://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/kyouikuhousin.html>）

（b）佐賀大学規程集

（<https://kiteikanri2011.admin.saga-u.ac.jp/>）

（c）学部・研究科の設置等に関する情報

（<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/setti/index.html>）

（d）中期目標・中期計画に関する資料

（<http://www.saga-u.ac.jp/koukai/mokuhyokeikaku.html>）

（e）大学の評価に関する資料

・ 中期目標期間評価・年度評価に関する資料

（<http://www.saga-u.ac.jp/koukai/nendojisseki.html>）

- ・ 自己点検・評価、認証評価等の評価に関する資料

(<http://www.saga-u.ac.jp/hyoka/gakugai/hyouka.htm>)

(f) 佐賀大学の取り組み

本学における各種活動の中で、特色ある事業や特にアピールしていく活動等について、その概要や実績等をわかりやすく紹介することを目的として公開している。

(<http://www.saga-u.ac.jp/koho/torikumi/>)

本学は、大学院（専門職大学院を除く。）を置くため、上記ア～ケの項目に加えて、学校教育法施行規則第172条の2の第3項に規定する次の事項を以下のとおり公表している。

サ 研究科、専攻又は学生の履修上の区分ごとの、当該大学院に入学した者のうち標準修業年限以内で修了した者の占める割合その他学位授与の状況に関すること。

（学校教育法規則の改正適用が令和7年度からのため、準備中）

シ 大学院設置基準第十四条の二第二項に規定する学位論文に係る評価に当たっての基準に関すること。

（学校教育法規則の改正適用が令和7年度からのため、準備中）

⑩ 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

本学では、佐賀大学教育委員会において教育の質保証の実施及びファカルティ・ディベロップメント及び教育支援に関する事項を審議する。教育委員会には教育質保証専門委員会が置かれ、次に掲げる活動を行う。【添付資料 31】

ア 教育の質保証の実施に関する事項

イ 教員の資質の向上及び能力の開発に関する事項

ウ ティーチング・ポートフォリオ及び情報通信技術活用教育等の教育支援に関する事項

エ その他委員長が特に指示する事項

平成 25 年 3 月に制定された「佐賀大学学士課程における教育の質保証に関する方針」【添付資料 32】及び「佐賀大学学士課程における教育の内部質保証の推進に係るガイドライン」【添付資料 33】に従って、組織的に FD 活動に取り組んでいる。

また、全学的な取組に加え、本学環においては、学環または連係協力学部独自の FD 活動に参加する。

⑪ 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

令和 6 年 4 月に創設した「佐賀大学ウェルビーイング創造センター」キャリア支援部門（以下、「キャリア支援部門」）は、従前のキャリアセンターを発展させた組織であり、理工系女子学生が結婚・出産等のライフデザインを描く上で就職先に悩んでいるといった複合的な悩みに対応できる体制を構築することで、学生生活から就職まで抜けや漏れがないシームレスな支援を行っていくことを目的としている。

ア 教育課程内の取組について

1 年次開講「大学入門科目」の 2 コマにおいて、講義及び「社会人に学ぶ」として本学卒業生による講演を行い、キャリアデザインや働くことの意義、将来の仕事について考える機会を設けている。また、キャリアデザインの必要性や本学をとりまく環境、そして社会の最新の動向を知り、大学時代の学びと自分の将来について具体的に考える契機となるべく、教養教育科目「ライフデザインとセルフ・リーダーシップ」（前学期 2 単位）、「キャリアデザイン」（後学期 2 単位）を開講している。キャリア教育については今後も順次充実を図っていく。

イ 教育課程外の取組について

下記のような様々な取組を行うことにより、社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う支援を行っている。

【就職指導体制及び就職担当教員の配置】

キャリア支援部門の管理運営や学生の就職に関する重要事項、合同企業説明会や個別会社説明会等キャリア支援部門が実施するイベントに関する事、キャリア支援部門の予算に関する事、キャリア教育の実施に関する事等を審議するキャリア支援部門会議が置かれ、キャリア支援部門長、キャリア支援部門専任教員、各学部就職委員長クラスの教員で構成されている。

その他、各学部就職担当教員がおり、学生の就職指導に当たっている。

#### 【就職ガイダンスの開催】

就職ガイダンスについては、就職活動の流れから始まり、企業研究、情報収集の仕方、インターンシップへの取組、エントリーシートの書き方、面接対策等、基本的には、多数の学生を対象に、講演方式で行うことが多いが、社会人としての基礎的なマナーや立ち居振る舞い、模擬面接・グループディスカッション等、演習を交えての支援も行っている。

#### 【学内合同・個別会社説明会の実施】

学内での合同会社説明会、個別会社説明会の実施及び学外での大規模合同説明会への案内等を行っている。

#### 【就職相談】

夏季休業期間中を除き、平日に常時1名以上の就職相談員を配置している。相談形式は、対面とオンラインで、原則として、各人40分、予約の上、一対一の個別相談である。相談員の構成は、キャリアコンサルタントや中小企業診断士、社会保険労務士、企業採用担当経験者等、経験豊富な専門の相談員によるアドバイスを受けることができるように体制を整えている。

#### 【就職先の開拓】

キャリア支援部門・学生生活課教職員等が、企業との就職情報交流会等に参加し、採用やインターンシップに関する企業の相談窓口（企業向けオフィスアワー）を開設し、企業の人事担当者との交流や面談を通して就職先企業開拓に取り組んでいる。

#### 【就職に関する広報活動】

学生のキャリア支援部門の認知度を向上させるため、ホームページに加え、各種情報をメールで発信する等、積極的な広報活動を行っている。企業に対しても毎年パンフレットを配布し、本学への理解と学生の採用を依頼している。さらには、キャリア支援部門公式 Teams の開設等、就職に関する広報の新たな取組を実施している。

#### 【インターンシップの紹介】

インターンシップは、卒業後の進路を決定するにあたり自分の適性を確認することができ、また仕事・業界の理解を深めたり職業観を培う有効な手段であるため、積極的に学生に周知し、学生の就職活動を全面的に支援している。

#### 【キャリア・アクセラレーションプログラム】

全学生を対象に、資格取得を目指すものや企業と深く連携する実践的なプロジェクトを提供し、キャリアデザインを加速・促進するためのプログラムであり、自身のキャリアデザインやキャリアアップに高い意欲を持つ学生をターゲットとして、社会人基礎力やキャリアオーナーシップの育成、キャリアデザインの明確化を目指すことを目的に、企業と深く連携する実践的なプロジェクト等を実施している。